

## 千葉県我孫子市・手賀沼周辺地区 3年間の活動報告

市民による「外来魚のいない水辺づくり」

手賀沼水生生物研究会 鈴木 盛智

手賀沼水生生物研究会では3年間、地球環境基金の支援を受けて以下の活動を行ってきました。

1. 周辺の湧水池における調査・保護水面（ビオトープ）づくり・外来魚駆除活動
2. 手賀沼湖底&生き物調査
3. 流域の谷津田および用水路における生き物調査
4. 手賀沼親子自然観察会
5. 手賀沼勉強会

今回の発表は、周辺の湧水池における調査・保護水面（ビオトープ）づくり・外来魚駆除活動の取り組みについて紹介します。

はじめに

四つ池は、千葉県北西部に位置し、利根川と手賀沼に挟まれた我孫子市にあります。利根川流域にある氾濫原で、古利根川の一部が湧水池として残ったものと考えられ、1982年に日本電気の事業場内の一部となりましたが、1950年代の地形を現在も維持しています。1970年代後半に特定外来生物であるオオクチバスとブルーギルが侵入したため、在来種は激減したものとされますが、池の開発が行われなかったため、池周辺には現在も良好な水辺環境が残されていて、ここをすみかとする希少トンボも絶滅を免れて今日に至っています。

手賀沼水生生物研究会では、2007年に1回、2008年には2回事前調査を行った結果、希少トンボは生息しているものの、外来魚の生息数が異常に多く、継続調査が必要との思いから、2009年から全国ブラックバス市民防除ネットワーク(ノーバスネット)が提案する「外来魚のいない水辺づくり」の事業に名乗りをあげ、これを了承されて、調査を継続することになりました。事業開始当初の2009年は手探りの状況の中で、駆除釣りでの親魚の捕獲、サデ網を使った稚魚の捕獲のほか、モンドリ、四手網、刺し網設置による外来魚の捕獲、駆除を行いました。四つ池は企業敷地内にあり、場内入場は月に一度、平日の活動に限定され、作業努力量(人数×時間)が少ない中で、効果を上げるための方法を模索しました。また早急にできる保全を考えると、外来魚駆除だけを行っていたのでは、絶滅危惧種保全には間に合わないため、希少トンボの発生時期に生息域の正確な把握をするため、2009年6月 日本蜻蛉学会幹事の苅部治紀氏を調査講師に招き、専門的な立場から四つ池の保全についての提案を受けました。

- ・水生昆虫については、外来魚の食圧で壊滅的な状況に陥っている。
- ・ヒシなどの水生植物についても減少している。ブルーギルの食圧によると思われる。
- ・早急にできる保全を行う必要がある。ビオトープ設置を優先すべきである。

保護水面（ビオトープ）づくり

## 四つ池の生き物調査を実施

生き物調査で確認した四つ池湧水池の在来種、外来種

繁殖可能な個体とそうでないものを分けて統計表を作成、そこから見えてきたものは。

四つ池外来魚 全長別駆除数

捕獲方法について モンドリ、セルピン、オダ網、刺し網、駆除釣り、サデ網、タモ網によるガサガサ 使用に当たっての注意点、効果的な利用方法について

捕獲データから見えてきたこと

2009 年春の四つ池は、外来魚のオオクチバス、ブルーギルの生息数は、ほぼ飽和状態であったと推測。理由として繁殖期にあたる 5 月～7 月に捕獲した 15cm 以上のブルーギル親魚の胃内容物から多数のブルーギル稚魚を確認したため、盛んに共食いが行われていた。

B 池では、2010 年以降保護ネットで各池の魚の行き着を遮断した結果、オオクチバスはブルーギルの食圧により繁殖が抑制されており、生息数はブルーギル 10 に対し 1 以下の割合であった。オオクチバス稚魚についてガサガサによる捕獲では、繁殖期以外はほとんど確認されなかった。駆除釣りや電気ショック による捕獲で、オオクチバスの生息数は確実に減少してきた。独り勝ちの状態のブルーギルについては、10cm 以上の親魚の捕獲によりブルーギル稚魚の捕食数が減り、ブルーギル稚魚は、一時的に増加したものと思われる。これについては 2010 年 12 月から行っている電気ショック を併用したガサガサによる稚魚捕獲を冬季に行うことで効果は上がってきており、今後も作業努力量を増やし駆除圧を高めていくと、オオクチバスはまもなく根絶、ブルーギル根絶も視野に入ってくるものと思われる。

ブルーギル駆除に大変な威力を発揮

全内漁連貸与・電気ショック 使用報告

四つ池勉強会

日本電気（NEC）との協働事業の立ち上げ

四つ池保全の今後について